

6月7日 キリストの聖体 ヨハネ6章51～58節 「世の終わりまでともにいる」しるし

聖霊降臨の主日で復活節が終わり、次の日から年間に戻っています。聖霊降臨以後の主日は先週の三位一体、今週のキリストの聖体の主日とお祝いが続くのでお気づきでないかもしれません。しかし、聖霊降臨は教会の誕生日とされるので、二回目の年間は教会の宣教を記念します。その教会の時代にイエスは聖体の秘跡を通してともに働かれます。

第一朗読は旧約聖書の申命記から、荒れ野を進む民を養うために天から与えられたマナについて語られます。マナが降った出来事自体は出エジプト記16章に述べられています。福音のイエスの言葉に密接につながるようにこの箇所が選ばれているのでしょう。ちなみに森永マンナというビスケットがありますが、このネーミングは昭和五年の発売当時、クリスチャンだった森永社長が旧約聖書のマナから名付けたものです。

福音は、イエスがパンを増やす奇跡を行ったあと、追いかけてきた人々に向けて語られた箇所です。「ユダヤ人たち」と書かれているので貧しい人たちだけでなく、ファリサイ派や律法学者などの指導者も含まれていたようです。イエスはその旧約のマナを「先祖が食べたのに死んでしまったもの」と言われます。彼らにとって、イエスの発言は受け入れがたいものでした。というのは、旧約聖書、とくに「律法」と呼ばれるモーセ五書（創世記～申命記）をないがしろにしているように感じたからでした。しかし、イエスはマナを否定したのではなく、神のもとから降ったご自分がこの世を生かすパンであることを告げられたのです。マナも単に飢えを満たすためだけではなく、神の思いに従って生きることが必要であることを示された神のわざでした。

イエスが命のパンであることを表すために教会が行うのがミサ、すなわち聖体の秘跡です。弟子たちは宣教活動の中での喜びや苦しみを分かち合うために集まり、イエスの「これをわたしの記念として行いなさい」という言葉を思い出し、最後の晩さんの記念を行ったのではないのでしょうか。そのときには「イエスがともにいて働いてくださる」ということを実感したことでしょう。第二朗読にあるように、聖体祭儀は早い時期から行われていたようです。そして今に至るまで、最も大切な秘跡として教会に受け継がれてきたのです。

秘跡は目に見えない神のわざを体の感覚を通して体験するしるしです。とくに聖体の秘跡はそのことをはっきりと表しています。イエスご自身がパンとなって自分の体の中に来てくださる聖体の秘跡はだれにでもわかるしるしであるといえるでしょう。司祭あるいは聖体奉仕者が「キリストのおんからだ」という聖体を授ける言葉は「これはキリストの体です」という宣言です。そして「アーメン」と答えるのは、「はい、わたしを生かしてくださるキリストの体です」という信仰宣言です。ですから、みなさんもいただくときにははっきりと宣言してくださいね。そして心に来てくださったイエスとともに、周りの人にその喜びを分かち合いましょう。

(柳本神父)